

7月19日(日)



当店自家製

めんつゆと鯛めし

1パック 980円 (税込)



西田鮮魚店

72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

ここ最近、ウォーキングをしています。田舎の朝、夕方は涼しくていいのですが、動物が出てこないかと心配しながら歩いています(笑)。草がカサカサ言うだけでビビります。

今年は早々と暑い日が続きますね。気づいたら梅雨あけてました。普段、冷房の効いた室内で仕事している私たちにとっては、暑いのは天敵です。買い物にでるだけで体力を奪われます。皆さんも熱中症に気をつけてくださいね。

今回の広告は、暑い日にピッタリ、鯛めしとうめんです。前回かなりの反響を頂きました。今回は、鯛の骨を焼きしつかり炊き込んだだし汁で作った鯛めし。そして5種の薬味「大葉、青ねぎ、白ねぎ、みょうが、しょうが」をトッピングした掛保乃糸を使用したそうめんのセットです。食欲が無くなる季節に、是非このセットを食べて、暑い夏を乗り越えましょう！

そして丑の日の鰻、たくさん注文がありありがとうございます。両面を再度炙ると香ばしく、より美味しいです。ご来店お待ちしております。

『マイケル』を見た

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I マイケル ジャクソンと私

映画『マイケル』にぶっ飛んだ。

『キング・オブ・ポップ』と呼ばれたマイケル・ジャクソン。

そのマイケルのライブの熱狂がスクリーンに甦る。物語とともに。そして、映画館が、そのままライブ会場になった。

映画『マイケル』は、4月24日のアメリカ公開に遅れること7週間後の6月12日、日本でも封切られた。すでに世界中で大ヒットしていた。

私は映画館の予告編で知り、公開を待ちわびていた。

といって、マイケルのファンだったことはない。

だから、知っていたのは『フィンガー5』がモデルにした黒人5人兄弟の『ジャクソン5』のボーカルだということくらい。

さすがにゾンビが躍るミュージックビデオ『スリラー』は、ちよくちよく目にしていたが……。

もうひとつマイケルを好きになれなかったのは、そのスキャンダラスな印象のせいだったかもしれない。自宅に『ネバーランド』という動物園だか遊園地だかをつくり、ここで小児虐待の疑いをかけられるというスキャンダルに巻き込まれたこと。けつきよく無罪だったが、悪い意味でのミステリアスなエンターティナーというイメージをぬぐえなかった。

しかし『マイケル』を見てそれは消えた。彼はふつうの人の何倍も、こどもや動物が好きだったし、やさしかったのだろう。それこそ天才的に。映画を見ればそれがわかる。

それはともかく、予告編を見て「これは見んといけん」と思った。切り取られる音楽シーンがめちゃくちゃカッコいい。

調べると、この『マイケル』のプロデューサーのグレアム・キングは、あのクイーンの『ボヘミアン・ラプソディ』をプロデュースした人。『ボヘミアン・ラプソディ』も世界で記録的な大ヒットをしたが、ライブシーンが圧巻だった。2回見た。あのころクイーンなんて興味もなかったのに……。映画のライブシーンを見てファンになった。『マイケル』も……。

II マイケル・ジャクソンとジャファー・ジャクソン

『マイケル』を見ると決めてから「予習をせんといけん」と思い始めた。『ボヘミアン・ラプソディ』を見たとき、もっと曲を知っていたら、さらに感動しただろうにと残念に思ったから。耳になじんだ曲があると興奮のボルテージは上がる。

今はユーチューブという便利なものがある。予習開始だ。マイケルの動画を見まくった。どこかで聞いたことがあるような……。『ビリージーン』『ビートイット』。なんだ、マイケルの曲だったのか。それにしても、かっこいい。歌もダンスも超絶かっこいい。聴かせる。見せる。魅せられた。今まで、なんで無視してたんだろ。さらに驚いた。えっ、作詞も作曲もマイケル？びっくりした。

「天才じゃ」

キレッキレのダンスは知っていたが、そうか、『ムーンウォーク』はマイケルだったのか。木村拓哉の得意技かと思っていた。『ビリージーン』のダンスとして披露したのだそうだ。それまでも、黒人ダンサーたちの間で、似たようなステップはあったみたいなのだが、完璧な形で踊ってみせたのはマイケル。それ以来、『ムーンウォーク』と呼ぶようになったのだとか。『ノーグラヴィティ』も驚いた。キレッキレなんていうもんじゃない。人間技？

「神じゃ」

ユーチューブのおかげで、マイケルの曲が耳になじんできた。それにしても、というか、歌もダンスも他に比べる人を知らない。「ああ、これが唯一無二というやつか」、そう納得させられた。

映画を見る準備はできた。

マイケルを演じるのは甥っ子のジャファー・ジャクソン。彼がすごい。マイケルがそこにいる？

2年間びつちり、叔父のマイケルの本を読み、動画を見て研究したというが、そこはやはり血の濃さというのか、マイケルに見えてくる。ムーンウォークもノーグラヴィティも……。そして話す、その話し方までも。

後半、『スリラー』の再現シーンは、息をのんだ。「すげえ!!」。最後まで圧倒的なライブシーンが続く。映画のカメラワークは、実際のライブ以上にステージを身近に映し出す。臨場感というなら、この上ない体験といつていい。見るしかない。IMAXで。

III IMAX

7月1日(水)。ソレイユに行った。

『ボヘミアン ラプソディ』を見た時、つくづく思った。ライブの感動は大画面の大音量でこそ堪能できるのだと。『マイケル』を見るにはIMAX以外は考えられなかった。誰の思いもそうなのだろう。平日というのに三分の二は埋まっている。空席が少ない。席を選べない。そうか、月の最初の水曜日は映画の日で割引されるからか、とは思ったが、ファンはよくわかっている。マイケルの魅力はIMAXでこそ最大パワーで感じとれると。

私と同世代の人も多い、というか、この世代が多い。

50才で亡くなったマイケルだ。その残像は永遠に若い。しかし、1958年(昭和33年)生まれ。今生きていれば67才。私たちはリアルタイムでマイケルを見ていた。思いは強い。

これは悦子にも見せてやらなければ。

4日後、悦子を誘って、また『マイケル』を見た。2度目だ。

雨の日曜日。駐車場はいっぱい。屋上に止めざるをえなかった。やばい。多いだろうとは思ったが想像を越えた。空席が少ないどころではない。画面を見上げて首が痛くなる最前列か、端っこの席しか空いてない。299席の劇場がほぼ満席。仕方ない。前から5列目、右端から3席目、4席目をとった。まあ、大丈夫だったが、いつものように真ん中の席で見なかった。

2度目は、いろいろ確認しながら見れる。『ジャクソン5』時代から、ソロへと成長していく様がより理解できた。天才は大変だ。悦子は？悦子もマイケルのファンになったに違いない。前のめりで見っていた(ように感じた)。

2人の間にはポップコーンのビッグサイズ。悦子はアイスコーヒー、私はペプシ・ゼロ。2時間と8分。ポップコーンは空っぽに。



2026年7月19日